

小城鍋島文庫蔵書解題稿 (三)

中尾友香梨・白石良夫・大久保順子・土屋育子・沼尻利通・日高愛子

An Annotated Bibliography of Books in the Ogi Nabeshima Collection (Part 3)

Yukari NAKAO, Yoshio SHIRAIISHI, Junko OHKUBO, Ikuko TSUCHIYA, Toshimichi NUMAJIRI, Aiko HIDAKA

小城鍋島文庫研究会 (<https://sagakoten.jindo.com/>) では、二〇一五年度以来、当文庫蔵書の悉皆調査を実施している。目指すところは、全蔵書の書誌解題の作成にある。その途中報告として、まず白石良夫が小城鍋島文庫蔵書解題稿(一)を『佐賀大 国文』第四十四号(二〇一六年三月)に発表し、ついで中尾友香梨・中尾健一郎が同(二)を本紀要第五号(二〇一七年三月)に発表した。さらに二〇一七年五月、二篇をまとめ、ほかの会員も寄稿して『小城鍋島文庫蔵書解題集(試行版)』を出した。本稿はそれを継ぐものであり、今後このような形で解題稿を蓄積してゆく。

解題執筆においては、それがかつて小城鍋島藩の蔵書の一冊であったという歴史的事実を、つねに強く意識する。たとえそれが片々たる雑本であっても、一冊の薄汚れた端本ほんであっても、である。このような視点に立った書誌解題を集積し、専門家の読むに堪える、小城鍋島文庫の歴史と現在を語る、そんな読み物を実現することを目指す。

小城鍋島文庫の個々の資料を、そこに在るモノとして記述し、モノに語らせる。すなわち当文庫蔵書の書誌事項を優先することに努め、内容や史的位置づけなど一般的解説については必要最小限に抑えた。ただし、当文庫にしか伝存しない資料については、詳しい内容に立ち入った。

本研究は、科学研究費基盤研究(C)「小城鍋島文庫蔵典籍の解題目録と蔵書印データベースの作成」(研究代表者 中尾友香梨、課題番号 18K00282)の助成を受けたものである。

【キーワード】 小城鍋島文庫、藩蔵書、解題

古今雑事集篇（ここんざつじしゅうへん）00-1

写 鍋島直嵩編か

半紙本、六卷三冊。第一冊（巻一〜三）、第二冊（巻四・五）、第三冊（巻六）に仮綴じ。外題はいずれも共紙表紙に打付け書きで「古今雑事集篇」。内題は各巻「古今雑事集篇」。また巻四に尾題「雑事集」。序跋・奥書の類なし。草稿本。貼り紙や胡粉による訂正あり。蔵書印「曲肘亭」「叢桂館蔵」。

和漢・古今の書からの抜き書き集。随意に書き留めたと思しく、特段の編集意図は認められない。文学・歴史・有職関連を中心に、広く雑多な記事に関心を示す。なかに、安永三年（一七七四）の大小暦を詠み込んだ発句（巻一）、安永九年房総沖の唐船漂着の情報（巻五）が載り、本書成立の時期を示唆する。ならば、蔵書印から推察して、鍋島直嵩の編になるものか。  
（白石良夫）

贍草（にぎわいぐさ）00-6 刊

大本、二巻二冊。後補青色無地表紙の左上、後補の（一部に彩色が手書き画風に施された）題簽に、墨筆の外題「賑草上（下）」がある。

第一冊上巻、第二冊下巻ともに内題・尾題なし。版心題「贍草」。第二冊下巻の本文五十八丁表に刊記「天和二年歲次壬戌麦秋中流 京室町惣門辻書肆得栄堂 二口伊豫彫梓」あり。各冊頭に蔵書印「荻府学校」がある。書入なし。

本文庫蔵本と同版とみられる国立国会図書館蔵本の原表紙には、印刷題簽の「にきはひ草」の外題がある。編者・著者

情報につながるような著者名や序跋はなく、本文には内題も記されていない。諸研究では、第二冊（下巻）の「我いとけなき時より光悦そは近くなれて」等に記述されている本阿弥光悦の逸話、近世初期の和歌や飛鳥井家の蹴鞠に関連する聞書等を含めた随筆の内容をもつことから、作者を佐野紹益とする。  
（大久保順子）

〔参考〕川瀬一馬「桂離宮」管見附、佐野紹益の贍草のこと（青山学院女子短期大学紀要十一巻、一九五九年六月）

西山遺事（せいざんいじ）00-7 写

半紙本、十巻十冊。原題簽「西山遺事」、内題・尾題「西山遺事」。蔵書印「藤直愈印」。左の編者連名後書きあり。

右は西山公御一代の事ども、逐一その証拠を正し記し畢。此外之書、種々様々の説を申もの有りといへども、必以信用すべからず。暫らく証拠正しき様なる説を申共、此書面を以西山公の御行実を察し奉り、御性精より出不出之趣を考て、猥りに増補すべからず。穴賢。

臣 三木幾右衛門源之幹

元禄十四辛巳十二月日 臣 宮田半左衛門源清貞

臣 牧野木工之助清原和高

徳川光圀の言行録（和文）。元禄十四年（一七〇一）は光圀没の翌年。写本で流布した。別名「桃源遺事」。  
（白石良夫）

和語連珠集（わごれんじゆしゅう）00-8 刊 挙扇堂静栄著

大本、五巻五冊。全冊後補題簽、「和語連珠集」と墨書。

序題「和語連珠集」、目録題・内題・尾題・版心題ともに「和語連珠」。内題下に、

城南 拳扇堂静栄誌

とある(巻一のみ)。和及門の俳人というが、伝未詳。序文末、

宝永元甲申年洛下昌陽軒序

奥付、

宝永元甲申年五月吉旦梓

高辻通柝之馬場東入町

書林 中村孫兵衛

島崎忠兵衛

蔵書印「荻府学校」「菴蘿園」「不忒之印」。

和漢の故事を諸文献から抜出す。漢字片仮名表記で、典拠とした文献名を明記する。中国の類書に倣ったものであろうが、分類はなされていない。(白石良夫)

花紅葉都咄(はなもみじみやこぼなし) 0011 刊

半紙本、三卷三冊。原題簽「(火用心)花紅葉都嘶(咄)」、内題・目録題・尾題「花紅葉都咄(嘶)」、版心題「都咄(嘶)」。「千秋老人」から「焦燥主人」宛ての口上に見立てた序文あり。奥付、

天明八年戊申孟冬

江戸書肆 日本橋室町三丁目 須原屋市兵衛

大坂書林 心齋橋筋北久太郎町北江入 河内屋喜兵衛

京都書房 西堀川高辻上ル町 梶川七郎兵衛

蔵版目録「芸香堂仮名物蔵板目録」(梶川七郎兵衛)を付す。

また、「唐土奇談 全部五冊絵入り」という広告も付す。蔵書印「曲肘亭」。

天明八年(一七八八)正月晦日の京都大火災から迅速な復興までを、挿絵を豊富につかつてルポルタージュする。類焼の次第や被害状況、町の風説などが詳しく書かれる。著者は序文筆者の千秋老人だろうが、実名は不明。(白石良夫)

和学知辺草(わがくしるべぐさ) 0014 写

大本、三卷三冊。共紙表紙、仮綴じ。外題「和学知辺艸」(打付け書き)、内題・尾題「和学知辺艸」。序文は「和学知辺艸自叙」、その文末に、

寛政五年癸丑孟春 西肥 幽林舎散人題

卷末には、

寛政五年癸丑春穀旦 西肥荻城 散人編選

とある。「荻城」のあと二字分空白。同一人と思われるが、伝未詳。序文によって、小城藩士、寛政三年(一七九一)に致仕した由のみ窺える。

和学(日本学)の入門書。古代史・古代語・和歌・神道など幅広い知識を扱う。著者は漢学の素養をもち、真淵系統の新しい古学にも理解を示す。他に伝本を見ない。(白石良夫)

ほこりたたき(ほこりたたき) 0106 刊

半紙本、一冊。原題簽に「孝行和讃 因果和讃 施行歌 ホコリタ、キ 全」とあり、それら四作の和讃を収める。各作の内題とその下部、

孝行和讃 宣契上人作

因果和讃 ■■(墨格)

施行歌 白隠禪師作

ほこりたゝき 白隠禪師作

卷末最終行に左の刊記あり。

天保十三壬寅五月 伊勢国引接寺沙門法龍敬刻

末尾に「ほこりたゝきは童などのうたひやすからしめんが為に所々省略の仮名を記し置ぬ」とある。

宣契上人は未詳。白隠禪師(一六八五〜一七六八)は駿河の人。臨濟宗中興の祖。  
(白石良夫)

宗廟法諱略(そうびょうほういりやく) 01-11 刊

一枚。袋入り。袋の表に「宗廟法諱略」と印刷。末尾に「限百枚絶板禁売買」とある。歴代將軍とその妻妾たちの法諱・系譜・没年月日・墓所を記した、携帯用の簡便な一覧表。將軍は俊明院(十代家治)を最後とする。もともと新しい年記が慈徳院(一橋治斉内室)没の文化十四年(一八一七)五月八日なので、この年後半から十一代家斉が没する天保十二年(一八四一)のあいだの刊行であろう。

幕府との儀礼上の交際のために、諸大名家の江戸留守居役などが携行した。この種のもは頻りに製作され多く刷られただろうが、日常業務の実用必需品のゆえ、今日に残るものは少ない。  
(白石良夫)

筆記周易本義(ひつきしゅうえきほんぎ) 01-21

刊 中村惕齋著

大本、八卷八冊(卷五〜十二存)。原題簽「筆記周易本義」、内題・尾題も同じ、版心題「筆記周易本義」。内題下、

平安 仲欽敬甫著

門人阿州増田謙之益夫校

首尾の巻を欠くため、出版情報は不明。蔵書印「荻府学校」(大)。

朱熹著『周易本義』の注釈。「仲欽敬甫」は姓中村、惕齋と号す。名は之欽、字は敬甫。京都の朱子学者(一六二九〜一七〇二)。  
(白石良夫)

四書訓蒙輯疏(ししよくんもうしゅうそ) 01-32, 01-33

刊 安部井帽山著

半紙本、六卷六冊。卷六・八・九・十一・十四・十五が存。原題簽に「四書輯疏 論語一(〜十) 六(〜十五)」。「四書訓蒙輯疏」のうち「論語」部(卷六〜十五)。内題「四書訓蒙輯疏卷之六(〜十五)」、柱刻には上部に「四書輯疏」とあって、その下に「論語序説(堯曰)」とある。内題下「後学会津安斐著」。蔵書印「榎崎光信」「士葆」。一部に落丁あり。なお、小城鍋島文庫目録では二部に扱われるが、この六冊で一揃いである。

著者の「学会津安斐」は安部井帽山(一七七八〜一八四五)、会津藩の儒者、斐はその名、別号芝浦。古賀精里に学ぶ。

(白石良夫)

四書訓蒙輯疏（ししよくんもうしゅうそ） 01-34

刊 安部井帽山著

半紙本、二卷二冊（巻一・二存）。原題簽剥落。『四書訓蒙輯疏』のうち「大学」部。内題「四書訓蒙輯疏卷之一（一）」。柱刻には上部に「四書輯疏」とあって、その下に「大学章句序」また「大学」とある。内題下は前掲書に同じ。蔵書印なし。（白石良夫）

韓子解詁（かんしかいご） 01-39 刊 津田鳳卿著

大本、十一卷五冊（巻十一〜二十一存）。残存する原題簽に「韓非子解詁全書」とあり。内題・尾題は「韓子解詁」、版心題は「新刊韓非子解詁」。内題下の著者署名は、

加賀国臣 津田鳳卿邦儀甫述

その左に筆録者あるいは校訂者の名を付すが、氏名は巻によって異なる。「門人越中山内鈍君齡甫録」（巻十一〜十五・十九）、「門人越中山内鈍君齡甫／岡田元達甫全録」（巻十六）、「平維貞履信甫／山内鈍君齡甫全録」（巻十七）、「門人越中山内鈍君齡甫／金沢市島敬之維頭全録」（巻十八）、「門人越中山内鈍君齡甫録／金沢市島敬之維頭校」（巻二十）。また、巻十一末・巻十三末・巻二十末に浄書者「金沢寛季容書」の名あり。欄外に本文校異を注記する。

巻二十一 は付録、史記などから韓非関連の記事を引用する。該書は明治期の後刷本。蔵書印「長崎県小城中学校印」。津田鳳卿（一七七九〜一八四七）は加賀藩士。書物奉行などを務める。邦儀は字。（白石良夫）

龍頭古事記（りゅうとうこじき） 0211-16 刊 出口延佳校訂

大本、三卷三冊。原題簽「延佳神主校正」龍頭古事記」。内題・尾題「古事記」。校訂者の跋文、その末に、

貞享四年二月二十九日

豊受皇太神宮権祢宜正四位下度会神主延佳

とある。該書は京都文昌堂（永田調兵衛）の蔵版目録を付す後刷本。蔵書印「荻羹蔵書」。

頭注形式の最初の古事記本文。中冊と下冊に古本の奥書を版刻する。（白石良夫）

伊勢物語闕疑抄（いせものがたりけつぎしよう） 0212

刊 細川幽齋著

大本、五卷二冊。表紙外題「闕疑抄」（後補題簽）、内題「闕疑抄」。版心題「闕疑」。巻末に自跋には、

此物語の抄出年来あらましながら花夷のいとまなくて空く過侍るに此頃八条宮講読つかうまつるべきよしかしこき仰ごとをたひくうけ給はり侍るによてもとよりの心さしもしきりに催されつゝ三光院内府そのかみするよしはへりし長岡といふ所にて御講尺有し聞書残りとままりしをみ出て侍る其おりの厳命に予が外祖父環翠軒宗尤逍遙院殿へ聴聞せしを惟清抄と名付侍りし即其趣をもて有余不足をわきまへよとはんへりしかは愚なる心にかたのやうにひきあはせてしるしつけ侍る抑此講義恵雲院殿大覚寺准后義俊聖護院准后道贈其外宗養紹巴などにいたりてうけ給はりをよひしを初として愚見肖聞等の諸抄

をあはせ御説の儀に随ひて是を用捨せしむ論語に多聞闕疑ワタカハシキワツシンテイフ 慎言シツクナシ 其餘メノアヤリヲ 一則イチノサツ 寡オウ 尤モトモト といへりよて闕疑をもて此抄出の名とす其心あまれりやたらすやといふべきもの歟干  
時文緑五年仲春十五日に是をおふるものなり。

法印玄旨在判

と、成立の経緯、書名の由来、成立年時等が示される。「法印玄旨」は細川幽齋のこと。識語が、

此闕疑抄幽齋老新作之所也旨趣ノケツキセウハユカサイラウケンサク 見二奥書一予又被レ草之時侍二几下ハンヘルキカニ 仍被二免許一書写深秘二函底一莫レ出二窓外一メンキョセ 耳ヲミ

慶長第二孟冬十五日

也足叟素然在判

と刷られている。「也足叟素然」は中院通勝。奥付は、

寛文八戊申年初冬吉日 寺町二条下丁 中村五兵衛

とある。蔵書印「曲肘亭」。一冊目に巻一〜二。二冊目に巻三〜五。本文と注には朱点、朱合点、朱の濁点、墨の書入などが、全体にわたって付されている。

細川幽齋による『伊勢物語』の注釈書。江戸時代には刊本で広く流布した。  
(沼尻利通)

(参考) 大津有一「細川幽齋と伊勢物語闕疑抄」(『伊勢物語古註釋の研究』石川国文学会、一九五四年)

伊勢物語闕疑抄(いせものがたりけつぎしよう) 091-3

刊 細川幽齋著

大本、二卷二冊(巻二、三のみ存)。表紙外題「闕疑抄」(後補題簽)、内題「闕疑抄」。版心題「闕疑」。蔵書印なし。該書は、

091-03の寛文八年(一六六八)中村五兵衛版とは、匡郭の大ききなどが微妙に異なる。墨の書入れあり。(沼尻利通)

源氏拔書(げんじぬきがき) 091-8 写

大本、一冊。表紙外題「源氏拔書 全」と打付け書き。奥書、蔵書印なし。

『源氏物語』各巻の本文を、部分的に抜書きしたもの。抜書きは長くなく、本文の気になったフレーズを書き抜いたものと考えられる。該書では、濬標巻を「水衝石」とする。この「水衝石」の巻名表記は、『万水一露』と『源氏物語』のいわゆる無跋無刊記整版本に特徴的にみられる。本書は『万水一露』か無跋無刊記整版本によっていたと推測できる。全巻の抜書きではなく、鈴虫巻だけは抜書きがない。(沼尻利通)

源氏小鏡(げんじこかがみ) 091-11 写

大本、三卷三冊。表紙外題「源氏小鏡」。奥書、識語なし。蔵書印「曲肘亭」「叢桂館蔵」。該書の巻頭の目録によると、上巻の目録は、桐壺巻から薄雲巻、中巻の目録は乙女巻から匂宮巻、下巻の目録は橋姫巻から夢浮橋巻、をおさめていることになっている。しかし、実際には、上巻は桐壺巻から朝顔巻、中巻は乙女巻から紅梅巻、竹河巻、下巻は橋姫巻から夢浮橋巻までがおさめられる。

『源氏物語』の梗概書。伊井春樹の調査によれば、小城鍋島文庫本は第二系統本(改訂本系)の第三類本に分類されている。(沼尻利通)

〔参考〕伊井春樹『源氏小鏡』の諸本―その成長の諸相（『源氏物語注釈史の研究 室町前期』桜楓社、一九八〇年）

紫式部日記傍註（むらさきしきぶにつきぼうちゅう）09415

刊 壺井義知著

大本、一巻一冊（下巻欠。上巻途中で欠落）。表紙外題「紫式部日記傍註」（原題簽）、内題「紫式部日記傍註」、版心題「紫式部日記傍註」。蔵書印「墨田蔵書」。

序文は、

世之稱ニ才女ト者。不レ為レ不レ多。而漢ノ曹大家。踵ニ謹書ヲ於東レ觀ニ。博學高才。古今伝焉。

本邦亦不レ乏其人一。而紫式部特知レ名ヲ。所レ著日記一卷。文約詞達。亦可見ニ其一斑ヲ。壺井鶴翁。多年搜索。得ニ善本一。難レ読者慎レ字。難レ解者標レ注。参考校正。使ニ人易レ曉ヲ。乞ニ余一語一。因ニ記歲月一。以還レ之ヲ云

享保己酉之歲 藤原隆英序

とある。「壺井鶴翁」は壺井義知のこと。三十一丁まで残存。のこりの五丁はない。綴糸は切れ、裏表紙を欠く。佐賀大學受入時に、現在のような状態であったようで、最終丁の三十一丁裏に佐賀大学附属図書館の受け入れ印がおさされている。

壺井義知による『紫式部日記』の注釈書。まとまった『紫式部日記』の注釈書としては嚆矢となる。（沼尻利通）

無名抄（むみょうしよ）09515 刊 鴨長明著

大本、二巻二冊。後補題簽「無名抄乾（坤）」（墨書）、内題「無名抄」、目錄題「無名抄目錄上（下）」。序文・跋文なし。蔵書印「荻府学校」。奥付、

鴨長明抄云々

婦屋仁兵衛

本云元享二二年五月十八日於久我殿

鴨長明による歌学・歌論書。

（日高愛子）

和歌俗説弁（わかぞくせつべん）095124 刊

半紙本、三巻三冊。原題簽剥落。表紙中央に後補書き題簽「〔絵入〕和歌俗説弁」。内題・序題・尾題いずれも「和歌俗説弁」。版心は丁付けのみ。無署名・無年記の序文あり。蔵書印「曲肘亭」。奥付、

正徳二年壬辰正月吉日

京寺町松原上ル町

菱屋四郎右衛門板行

「神代もきかずの事」「世をうぢ山の事」など三十四項目の歌句（八代集、主として百人一首）について、ある注釈（俗説）を取り上げてそれを批判するという形で展開する。著者は明記されないが、「宵雨軒」なる人物の言説をもとにまとめられたとする（序文）。宵雨軒は浮世草子作家の月尋堂か。書名は井沢蟠龍の「俗説弁」から拝借したか。（白石良夫）

〔参考〕藤原英城「月尋堂の歌学書『和歌俗説辨』―翻刻と解題」（京都府立大学学術報告人文六十四号 二〇一二年十二月）

三翁和歌永言集 (さんおうわかえいげんしゅう) 093-10

刊 元翠編

半紙本、十卷二冊。刷題簽「新板絵入」三翁和歌永言集、内題「三翁和歌永言集」、版心題「永言」。序文末に、

時に元禄十五年の秋むさしの、  
露ふかき芝録山の下にすめる

甘蔗氏元翠序

奥付、

元禄十五年 十二月望日

玉屋次郎兵衛寿梓

目録・跋文なし。挿絵入り。蔵書印「曲肘亭」「叢桂館蔵」。

中院通茂門下である京極高門、正隆、永悦の歌集。版本は、五丁裏の末尾(永悦の歌)は詞書のみで歌がない。該書では六丁表の挿絵部分に「いつとなき富士のみ雪の麓にも萌て時する春の早蕨」と刷られた附箋を貼付し、歌が補われている。

(日高愛子)

〔参考〕『近世和歌撰集集成地下編』(上野洋三編 一九八五年)、『和歌文学大辞典』「三翁和歌永言集」(古典ライブラリー 二〇一四年)

歌林尾花末 (かりんおばながすえ) 093-11

刊 江民軒梅之・梅柳軒水之編

半紙本、百卷五冊。刷題簽「歌林尾花末」、内題「五社奉納和歌」、尾題「五社奉納和歌」。各冊巻頭に口絵あり。第一冊、無記名の梅柳軒水之自序。内題下に、

植山検校江民軒梅之

高弟梅柳軒水之 拾之

助業 永之

雪之

書之行事 求之

跋文に「江民軒梅之拜上」とあり。奥付、

元禄十六年

癸未正月吉日

江戸四谷竹町平野屋伊兵衛

江戸日本橋通壹町目須原屋茂兵衛 蔵板

卷末の跋に、

元禄壬午季春武州豊島郡

黄龍山

泰雲禅寺中興開山了然総書

于得髓室

「元総之印」(陰刻印)

蔵書印「曲肘亭」「叢桂館蔵」。

住吉・玉津島・北野・明石・江ノ島の五社に奉納された、武家歌人を中心に撰じた歌集。(日高愛子)

和歌継塵集 (わかけいじんしゅう) 093-12 刊 坂常惇編

半紙本、十二卷五冊。後補題簽「和歌継塵集」(墨書)、内題「和歌継塵集」(第五冊巻頭内題欠)、跋題「跋和歌継塵集」。挿絵あり。序文なし。第五冊末に「作者大概目録」を付す。奥付、

宝永七庚寅年正月吉旦梓行



帝都御書物所出雲寺和泉條

第一冊、後表紙に薄墨で、

われとゆふわれをしらさるわれなれはわれしらす共おも  
はぬはわれ

われをおもふの一ねんよりいろ／＼のあくねんする□<sup>(公題)</sup>  
と書かれる。

近世中期の地下歌人の和歌を四季・哀傷・羈旅・恋・雑・  
神祇・賀に部立して撰した歌集。  
(日高愛子)

松廼志都久(まつしのしづく) 0954-24 写 静明院詠

大本、十冊。原題簽「松廼志都久」(墨書)、内題「静明院  
殿御遺草」(第一冊)、「静明院殿御遺詠」(第二冊)。春部・夏部・  
月和歌秋之部・紅葉部・冬部・松部・月部・神祇部・雑部の  
構成から成り、巻末に「享和三亥十一月十九日御祭之和歌」  
を配す。第八冊「冬部」の前に「紅葉和歌」と題し、別料紙  
に記した和歌が合綴される。序文・跋文なし。蔵書印なし。  
鍋島直愈の母静明院(松子)の遺草集。編者は未詳。空白  
等が多くあり、未元本と思われる。  
(日高愛子)

景物詩(けいぶつし) 097-9 写 鍋島直能作

大本、一冊。原裝表紙。題簽なし。表紙中央に打付け墨書  
き「景物詩」。表紙左肩に小さく墨書き「海外ハコレ歟」、  
さらにその右に大きく墨書き「海外ハ外ナシ是歟」。序跋・  
目録・奥書等なし。蔵書印「藤」「荻府学校」。

漢詩集。鍋島直能自筆。参勤交代の道中作を清書したもの。

詩題は「富士山」「登西山」「遊石山寺」「過清水寺」等。

表紙の「海外ハ外ナシ是歟」等の書込みについて。現存す  
る天保十四年(一八四三)と嘉永元年(一八四八)の『御蔵  
書目録』はいずれも「海外 一冊」を載せており、おそらく  
その後の書物点検で、この書籍以外、該当する書籍が見あた  
らないことから、このような書込みがなされたと推測される。  
(中尾友香梨)

桜岡詩歌(おうこうしいか) 097-10 写 鍋島直能編

大本、一冊。原裝表紙。題簽なし。表紙左肩に打付け墨書  
き「桜岡詩歌」。序跋・目録・奥書等なし。蔵書印「荻府学校」。  
小城の桜岡を詠んだ漢詩文・和歌を収録。卷子本の写しと  
見られる。同じ趣向の詩歌集に『八重一重』(097-05)があり、  
後者が京都の公家衆と江戸の林門による作品集であるのに対  
して、該書は直能本人と家臣の作品が中心。「換鷺亭」と題  
する漢文末に、

寛文丙午初秋援毫於桜岡館 楽山

とあり、寛文六年(一六六六)頃の成立と推測される。「楽山」  
は直能の別号であろう。ほかに「宿花散人」等の別号も該書  
の中で用いられている。  
(中尾友香梨)

桜町院卿臣うた(さくらまちいんきょうしんうた) 097-11

写 職仁親王・音仁親王詠  
中本、一冊。原裝表紙。左肩に原題簽あるも、文字がかす  
れて一部判読困難。原題簽の右側に墨書き後補題簽「桜町院

卿臣うた」。目録・跋文・奥書等なし。蔵書印「曲肘亭」「叢桂館蔵」。

巻頭に、

寛延四年辛未四月廿三日、奉期桜町院之小祥。忽驚月如流水、遥思往事去不還。夙夜只小心哀慕、猶不寧。今以南無大日覺王之字、斯為十首之冠、蓋聊述薄瀆之懷耳。

中務卿職仁親王

とあり、「な・む・た・い・に・ち・か・く・お・う」（南無大日覺王）の文字で始まる和歌十首を収める。続いて、

寛延四年孟夏下三、嗚呼、日月不居、卒正当桜町院聖期。故感傷無窮、慕涕難止。謹繕写一卷、誠取普門品之号為五首之冠。是乃嗟嘆之餘、聊述拙陋之志奉獻云。

常陸大守音仁親王

とあり、「ふ・も・む・ほ・む」（普門品）の文字で始まる和歌五首を収める。

桜町天皇の一周忌を記念する職仁親王と音仁親王の歌集。

（中尾友香梨）

名月の詩歌（めいげつのはるか）09712 写 松平定信編か

大本、一冊。共紙表紙。題簽なし。表紙中央に打付け墨書き「名月の詩歌」、右側に「寛政三亥歳八月依仰命述作之」、左下に「薬王寺扣」。序跋・奥書等なし。詠者目録あり。蔵書印なし。

「良夜」をテーマとする詩歌集。詠者は、松平定信をはじめ

めとする幕閣や高級旗本二十八名。將軍家斉の命により、定信が編纂したか。

（中尾友香梨）

寿章（じゅしょう）09713 写

大本、一冊。共紙表紙。題簽なし。表紙中央に打付け墨書き「寿章」、右側に「寛政四壬子冬十一月五日」。目録・奥書等なし。蔵書印なし。

京都の公家衆と小城藩士たちによる寿歌、寿詩文を収める。平国作「奉寿君大夫人六十初度序」に、

寛政壬子之冬十一月庚子、当我君大夫人六十初度之辰。

公固存懼喜之孝、於是開筵於西岡、恭祝無疆之寿、且使群臣陪其席。（中略）夫君大夫人、京師之生、而朝紳之女也。（後略）

とあり、また末尾を飾る式部大輔為徳卿の漢詩には、「詠春松、賀鍋島加賀守大孺人」という題がついているので、小城藩第六大藩主・鍋島直員（加賀守）の正室で、五条為範の娘であり、直嵩と直愈の母である松子（静明院）の還暦を祝う詩歌集と判断される。

（中尾友香梨）

草稿（そうこう）09714 写

大本、一冊。共紙表紙。題簽なし。表紙左肩に打付け墨書き「草稿〔詩集〕」、中央に「謹呈 草稿」。序跋・目録・奥書等なし。蔵書印なし。

漢詩集。詩題に「恭奉送閣下東上」（園田寛）、「和井南涯之韻、奉送公東觀」（太田魯）等とあり、参勤交代で江戸に

上る藩主を見送る藩士たちの送別詩集。江戸後期の成立か。

(中尾友香梨)

詩集(しじゆ) 097-15 写 鍋島直愈作か

大本、一冊。原裝表紙。題簽なし。表紙中央に鉛筆書き「詩集」「謝友人贈梅花得真韻」。序跋・目録・奥書等なし。蔵書印「松平愈朗」「温郷」。

漢詩集。所収作品の詩題に「壬寅歳旦」とあることから、国文学研究資料館のデータベースは本書の成立を「天保十年(一八三九)頃」とする。しかし別の作品の詩題に「夏日送直宜帰郷」とあり、直宜(一七六三〜一八二〇)は小藩第六代藩主・鍋島直員の四男で、のち肥前鹿島藩の第八藩主となった人物。したがって、本書の成立は天明二年(一七八二)頃とすべきであろう。作者は直宜の兄で、宝暦十四年(一七六四)に小城藩第七代藩主となった直愈と推測される。(中尾友香梨)

山水奇観(さんすいきかん) 097-16 刊 淵上旭江著

中本、二巻二冊(前編巻一、巻四のみ存)。二冊とも原裝表紙、題簽剥落、その跡に打付け墨書き「山水奇観 一(二三)」。目録なし。内題・序題・尾題なし。版心に「山陰」(巻一)、「西海」(巻四)。蔵書印「萩亭蔵書」。

見返し、

日本勝地真景 千里必究／不許翻刻

山水奇観 前編／四冊

旭江先生縮図 浪華書林合梓

自序末、

寛政十一年歳在己未春三月

旭江淵上禎白亀識 印「禎印」(墨刻)、「旭江」(墨刻)

跋文なし。奥付、

鳴亭蔵版 印「旭江」(墨刻)

寛政十二年庚申歳四月

鳥飼市左衛門

松村九兵衛

合

浪華書林

渋川清右衛門

梓

柳原喜兵衛

巻四末に広告を付す。

旭江先生真景縮図

〈日本勝地〉山水奇観 全部十二冊

前編〔山陰、山陽、南海、西海〕四冊 出来

続編〔五畿、東海、東山、北陸〕四冊 嗣出

拾遺〔五畿、七道 合輯〕四冊 近刻

日本各地の景勝を南画の手法で描き、一つずつ賛を付した画集。著者が自ら諸国を遊歴して実景を描いたものとされる。享和二年(一八〇二)に続編が出た後、続けて拾遺と附録を出版する準備を進めていたが、著者の死去により未刊に終わる。同書は当時盛んになりつつあった旅行熱に拍車をかけ、のちに歌川広重の名勝錦絵にも利用される。(中尾友香梨)

〔参考〕吉田恵理『『山水』画譜の諸問題―『芥子園画伝』和刻の経

緯と淵上旭江『山水奇観』を例に」(『江戸の出版文化から始まったイメーヂ革命―絵本・絵手本シンポジウム報告書』、金沢芸術学研究会、二〇〇七年)

### 小学句読詳解

(しょうがくくとうしょうかい) OKst-1

刊 宋・朱熹著、明・陳選句読

大本、六卷四冊。漢籍(和刻本)。題簽なし。打付書「小学句読」、内題「小学」、内題下「天台 陳選 句読」。冒頭に「小学之図」あり。序文「小学句読序」末尾に「成化癸巳五月望日天台陳選序」(成化九年 一四七三)、続く「小学序」末尾に「淳熙丁未三月朔旦晦菴題」(淳熙二十七年 一一八七)とある。序文の後ろに「小学題辭」が置かれ、本文に入る。目録なし。奥付、

寛文八戊申曆孟春吉辰刊板

蔵書印「荻府蔵書」「又新館」「寺井文庫」。すべての冊の表紙が見返し部分に朱の圈点が入れている。

『小学』は、南宋の朱熹(字は元晦・仲晦、号は晦庵など。一一三〇～一二〇〇)が友人の劉清之(字は子澄)に編纂を依頼し、その原稿に添削を加えて淳熙十四年(一一八七)に成ったと伝わる。本和刻本に基づいた『小学句読』は、明の陳選(字は一四二九～八六)が注釈を付して成ったものである。

(土屋育子)

〔参考〕宇野精一『小学』(新釈漢文大系 明治書院 一九六五年)。遠藤哲夫『小学』(明德出版社 一九六九年)

### 小学句読口義詳解

(しょうがくくとうこうぎしょうかい) OKst-2

刊 宋・朱熹著 明・陳選句読 宇都宮遯庵詳解

大本、十三卷七冊。漢籍(和刻本)。題簽「小学句読口義詳解」。内題「小学句読」、内題下「天台陳選 句読」、版心題「小学詳解」。序文「小学句読序」末尾「成化癸巳五月望日天台陳選序」、「小学序」末尾「淳熙丁未三月朔旦晦菴題」。序文の後ろに「小学題辭」「小学句読口義詳解総論」「小学句読口義詳解引用書目」が置かれ、本文に入る。目録なし。跋文の末尾、

延宝戊午秋九月穀旦求身堂宇都宮由的跋

奥付①、

延宝八庚申年季秋良辰繡梓

奥付②、

二条通衣棚/京都書肆/風月莊左衛門

蔵書印「荻府蔵書」「又新館」

本書は、明・陳選『小学句読』に基づき、宇都宮由的(一六三三～一七〇七)が詳細な解説を施したものである。宇都宮由的は、江戸前期の儒者、名は的、字は由的、遯庵と号し、周防の人。京都の松永尺五に学び、儒学・漢詩文の典籍の注釈を数多く著した。

(土屋育子)

### 小学句読

(しょうがくくとう) OKst-3

刊 宋・朱熹著、明・陳選句読

大本、六卷四冊。漢籍(和刻本)。原題簽「新刻校正小学句読」、内題「小学」、内題下「陳選句読」。序文「小学句読序」

末尾「成化癸巳五月望日天台陳選序」、「小学書題」(中身は oksh-1 や oksh-2 の「小学序」と同じ) 末尾「淳熙丁未三月朔日晦菴題」。目録なし。蔵書印なし。奥付、

有文閣蔵版

寛政七年乙卯孟夏穀旦

浪速書林 志多守全兵衛

柳原喜兵衛

松村九兵衛

大野木市兵衛

本書もまた陳選の『小学句読』に基<sup>レ</sup>づくが、oksh-1『小学句読詳解』、oksh-2の『小学句読口義詳解』のように注釈が無いことから、刊行年こそ後れるものの、詳解などの江戸時代の注釈本よりも前の形を残す版本であろう。なお、陳選句読の oksh-45『小学』(寛文八年(一六六六))や、国立公文書館に所蔵される享保十九年(一七三四)刊『小学句読』は、本文庫蔵本とは版式が異なるものの本文はほぼ同じであり、上記の推測を裏付ける。よ<sup>レ</sup>して、oksh-3 → oksh-1 → oksh-2の順に成立したと考えられる。(土屋育子)

**小学句読口義詳解**(しようがくくとうこうぎしようかい) oksh-1

刊 宋・朱熹著、明・陳選句読、宇都宮遯庵詳解

大本、一巻一冊(巻一のみ存)。漢籍(和刻本)。原題簽「小学句読口義詳解」、内題「小学」、内題下「天台陳選 句読」、柱題「小学詳解」。序文「小学句読序」「小学序」、「小学題辞」「小学句読口義詳解総領総論」「小学句読口義詳解引用書目」

が置かれ、目録なし、本文に入るとい<sup>レ</sup>るのは、oksh-2と同じ。識語「弘化三年午正月求之／福嶋孝女 花押」。蔵書印なし。

oksh-2『小学句読口義詳解』と同版本の端本であろう。(土屋育子)

**小学**(しようがく) oksh-45 刊 宋・朱熹著 明・陳選句読  
大本、一巻一冊(巻六のみ存)。漢籍(和刻本)。原題簽なし。  
打付書・内題ともに「小学」、内題下「天台 陳選 句読」。  
奥付、  
寛文六丙午稔立秋開刊  
蔵書印「松田印□」

陳選の句読のみが付された書と思われるが、oksh-3『小学句読』や、内閣文庫蔵享保十九年刊本とも版式が異なる。(土屋育子)

**小学**(しようがく) oksh-46

刊 宋・朱熹著 明・陳選句読 後藤世鈞訓点

半紙本、四巻一冊(巻一〜巻四のみ存)。漢籍(和刻本)。  
表紙題簽「新刻改正小学(後藤点)」「元亨」、内題「小学」、  
内題下「天台 陳選 句読」。  
見返し上部「翻刻」、見返し「芝山後藤先生定本／改正小学  
句読／福岡書肆 誠紀堂梓」。序文「御製重刊小学序」の末  
尾「崇禎八年七月吉日(一六三五年)」、「小学句読序」末尾「成  
化癸巳五月望日天台陳選序」、「小学序」末尾「淳熙丁未三月

朔旦晦菴題」。続いて「諸儒小学総論」「小学題辞」が置かれたあと、本文に入る。目録なし。

本書は、『小学句読』に基づき、後藤世鈞（号は芝山。一七二一〜一七八二）が訓点を施したものである。（土屋育子）

### 八種画譜（はっしゅがふ）Okai-10 刊 明・黄鳳地編

大本、四冊。漢籍（和刻本）。原題簽なし。打付書第一冊「五言画譜」、第二冊「唐詩画譜」、第三冊「画譜 山水」、第四冊「花詩譜」。見返し第一冊「新鐫五言／集雅齋藏板／唐詩画譜」、第二冊「新鐫六言／集雅齋藏板／唐詩画譜」、第三冊「唐解元做／清絵斎／古今画譜」、第四冊「新鐫草本／集雅齋藏板／花詩譜」。序文第一冊「唐詩画譜叙」、末尾「錢塘王迪吉」、第二冊「唐詩画譜序」、末尾「新都程涓」、第三冊「唐六如画譜序」、末尾「吳郡六如居士唐寅題并書」、第四冊「新鐫草本花詩譜序」、末尾「天啓元年清和月上浣 大鄒山人汪躍鯉撰」。本文第四冊末尾「辛酉孟夏新安汪泉書」。跋文第一冊冒頭「唐詩画譜跋」、末尾「新都兪見竜撰／虎林寶雲興草」、第二冊冒頭「六言唐詩画譜跋／新都兪見竜撰」、末尾「武林張一選書」、第三冊・第四冊跋文なし。蔵書印「小城蔵書」「荻亭蔵書」。明代新安（現安徽省に属す）の人、黄鳳地が編集した画譜。序文に、黄鳳地が編集したことが記されている。見返しに見える「集雅齋」は杭州にあった黄鳳地の書坊、「清絵斎」は主人の姓名は不明だが、万暦年間の蘇州の書坊である。もともと個別に刊行されていた八種の画譜（「唐詩五言」「唐詩六言」「唐詩七言」「梅竹蘭菊」「古今画譜」「草本花詩」「木本

花鳥」「名公扇譜」を一書にまとめたもの。「梅竹蘭菊」の序に万暦四十八年（一六二〇）、「草本花詩」の巻末と「木本花鳥」の序に天啓元年（一六二二）の記載がある。本文庫蔵本は「唐詩七言」「梅竹蘭菊」「木本花鳥」「名公扇譜」を欠く。他機関所蔵本により、最初の覆刻は寛文十二年（一六七二）であることが知られる。

本書は、江戸時代の文人画勃興期に、文人画家に大きな影響を与えたと評される。（土屋育子）

〔参考〕『八種画譜』（全九冊、美乃美、一九七八年）、小林宏光『中国の版画―唐代から清代まで』（東信堂、一九九五年）、佐々木丞平・佐々木正子『文人画の基礎知識』（至文堂、一九九八年）

### 白虎通徳論（びゃつこつうとくろん）Okai-18

刊 漢・班固著 清・汪士漢校  
大本、二巻二冊。唐本。表紙題簽なし。内題「白虎通」、内題下「漢班固纂 後学新安汪士漢校」。目録あり。蔵書印「荻府学校」「□斎珍藏」「叢桂館蔵」。

後漢の章帝が建初四年（七九）、宮中の白虎観に諸学者を集め、儒教の経書に関する解釈の異同を討論させた。この議論の記録を、班固（三二〜九二）が整理しまとめたのが本書である。「白虎通義」、または略して「白虎通」とも言う。本文庫蔵本は、校訂者として名前が見える汪士漢が刊行したものである。汪士漢は、出版地として有名な安徽新安の出版者で、清・康熙年間（一六六二〜一七二二）に活躍したとされる。彼が編纂した『秘書廿一種』は、康熙七〇八年（一六八八〜九）

刊や嘉慶三年（一七九八）刊などが知られる。『秘書廿一種』には『白虎通徳論』も収録され、その版式は本文庫蔵本とほぼ同じである。本文庫蔵本は、この『秘書廿一種』の『白虎通徳論』二冊のみが伝来したものと考えられる。（土屋育子）  
〔参考〕瞿冕良編著『中国古籍版刻辞典 増補版』（蘇州大学出版社、二〇〇九年）

中尾友香梨（佐賀大学全学教育機構 准教授）

白石良夫（佐賀大学地域学歴史文化研究センター 特命教員）

大久保順子（福岡女子大学 教授）

土屋育子（東北大学 准教授）

沼尻利通（福岡教育大学 准教授）

日高愛子（志学館大学 講師）